

## 進捗状況の概要

本取組は、次の3つの内容を重点事項として取組を進めている。①パイオニア・アドバンスト・プレイACEMENT (P-AP : Pioneer Advanced Placement)プログラムの創設と二重(デュアル)単位の付与、②ルーブリック評価による「課題研究」の高度化と入試への活用、③高大で一貫して汎用的能力を育てる ICT 教材の開発である。平成 27 年度における計画は順調に進んでいる。

特に、P-AP プログラムの創設と二重単位の付与制度を構築したことの意義は大きく、全国の高大接続モデルの先駆的な一事例といえる。

### 1 パイオニア・アドバンスト・プレイACEMENT (P-AP)プログラムの創設と二重単位の付与

高校生に大学レベルの教育の機会を提供するための検討を行い、平成 27 年 10 月から、スーパーサイエンスハイスクール (SSH)、スーパーグローバルハイスクール (SGH) 指定校の生徒を対象に、愛媛大学公開授業「英語総合 I」(全 15 回)、「数理論理学 (大学数学基礎)」(全 8 回 (集中))を開講した。

受講生徒が在籍する高校の教員からは、「アクティブ・ラーニングを取り入れた能動的な授業で、生徒の行動や発言が活発となり、リスニング・スキルの向上や高校の授業においても学習する意欲や姿勢に変化が見られるようになった。」との感想が寄せられたほか、生徒からも満足度が高く、好意的な結果となった。

また、P-AP プログラムの創設と二重単位の付与については、文部科学省との相談結果を踏まえて、学内関係規程等の整備を図り、P-AP プログラムを創設することができた。

これにより、平成 28 年度からは、高校生を高大接続科目等履修生として受入れ、本学の成績判定基準により大学の単位を付与できる。大学入学後は、当該大学の判断により、既修得単位として扱うこともできる。さらに、当該生徒が在籍する高校においては、高校長の判断により、学校外における学修の単位として認定ができる。なお、平成 28 年度においては、共通教育科目の授業のうち 12 科目 (うち 1 科目は複数回開講) を「高大接続科目」として高校生にも開放する。

### 2 ルーブリック評価による「課題研究」の高度化と入試への活用

平成 26 年 12 月に中教審から出された、いわゆる「高大接続答申」等を踏まえて、「能力・意欲・適性を多面的・総合的に評価・判定する入学者選抜」の方法として、汎用性の高い評価ツールを開発するため、高校教員と大学教員による検討を行い、「課題研究」評価に係るルーブリック評価を開発し、SGH 指定校の生徒を対象に試用した。

平成 28 年度においては、この結果を踏まえて、試用したルーブリック評価の改善を行い、対象校を拡げてルーブリック評価を実施するほか、ルーブリックの利用による高校教員の満足度に関する調査法を確立し、平成 28 年度に調査を実施する。

### 3 高大で一貫して汎用的能力を育てる ICT 教材の開発

本学の共通教育科目「日本語リテラシー入門」の e ラーニングコンテンツを高校生用に改訂し、「日本語リテラシー」の ICT 教材を開発した。「日本語リテラシー」の授業では、自己の表現能力を高め、コミュニケーションに不可欠な日本語運用能力のスキルアップを図ることを目的として、生徒一人ひとりが iPad を使用して授業を行った結果、平成 27 年度第 1 回日本語検定 3 級 (高校卒業程度レベル) では、認定率 (認定・準認定の合計) が高校生平均を 30% 上回る成績を収め、全国高等学校国語教育研究連合会賞優秀賞を受賞した。

教員の ICT 教材のスキルを高めるため、研究会を実施したことにより、iPad を利用した授業や教育改善、アクティブ・ラーニングが促進され、能動的な課題探求型学習へと繋がった。なお、ICT 教材の利用による教育効果については、初年次教育学会において発表した。

### 4 その他

本取組を円滑かつ効率的に運営し、より専門的な事項について検討するため、P-AP プログラム開発ワーキンググループ、「課題研究」評価ワーキンググループ、ICT 教材開発ワーキンググループを設置し、実施・運営体制を充実させた。また、FD「高大接続教育の推進」、学内外関係機関との連携強化、自己点検・評価や外部評価の実施、情報発信などを行った。